

# 優秀賞

『県庁の星』 桂望実著

文学部 文学科 1年 滝田岳臣

最近の若者は向上心がないという声をよく聞く。しかしそれも無理からぬことだ。就職活動がいい例だ。近年の学生の就職活動は不況を飛び越えて氷河期である。状況が悪いだけならばまだしも、凍ってしまっているのでは現状維持が精一杯。向上心どころではないだろう。しかし世間からは、若者が社会の厳しい現状を打破することを望む声が多く上がっている。どうやら若者には現状維持ではなく、成長が求められているらしい。凍り付いた若者は現状維持で手一杯であるにもかかわらず、周囲から「大人になれ」だの「勉強しろ」だのと言われ続けるのだ。そして周囲からの期待と現実には挟まれた哀れな若者は、やがて自らの思考さえも凍り付かせ、言われるままに大学の単位やら会社の営業成績やら資格やらを追い求めるようになる。果たしてそんなことが成長なのだろうか？

この物語の主人公野村聡は、県の上級試験をパスし県庁に勤める公務員、所謂エリートだ。そんな彼が県の人事交流計画によって、研修として一年間民間企業に派遣されることから物語は始まる。聡の研修先として選ばれたのは地元のスーパー。しかし、このスーパーは加工食品の表示不正や、消防法の違反など問題だらけ。そのうえクレイマーや万引きの対応など、書類やマニュアルに囲まれていた県庁とは違いすぎる職場に翻弄される聡。だが、教育係のパートリーダー二宮康子をはじめとするスーパーの従業員たちや、客として訪れる人々との触れ合い、合コンで出会ったあいちゃんとの別れが聡を変えていく。当初は書類やマニュアルだけを見ていた聡が、今まで見下してきた民間企業の「人」を見るようになり、不器用ながらも実直に仕事に打ち込んでいく。そんな聡の変化が周囲の人々にも影響を与え、やがては店を変えていく。本書はそんな、人と変化の物語だ。

自分が変われば今まで見えていなかったものが見えるようになる。それは世界が変わるのと同じことだ。ほんの少しでいい。自分がほんの少し変わることで世界がほんの少し変わる。変化した新たな世界はまた、自分を少し変えてくれる。そうして小さな変化が積み重なって、やがてそれは自分を、周りの人々を、それらを取り巻く環境を、大きく変化させる。本書でこの変化の連鎖のきっかけとなるのは、自分と違うものに触れること。自分と違うものを知り、受け入れることだ。ならば、あなたはそのため一体何を？ 自分と違うものに触れるために勉強をするのも悪くはないだろう。しかし、百聞は一見に如かず。どれだけ勉強したところで、それはあくまで他者からの伝聞であり、直接体験した方が自分に大きな影響を与えるのだ。マニュアルのような情報ではなく人との関わりを、他者からの伝聞ではなく直接的な体験を得ることこそが、より大きな変化を生み出す。そのような大きな変化をこそ、人は成長と呼ぶのだ。